

〈特集研究ノート〉

「正しいセクシュアリティ」論からみるカムアウトされた母親の経験

三部 倫子

はじめに¹

^{ヘテロノーマティヴ}異性愛規範²社会に生きるレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル（以下「LGB」）は、自ら生まれ育った異性愛の定位家族のなかで苦悩し、そこからのオルタナティヴとして新たな家族——「選び取る家族」（Weston 1997）——を形成するとみなされてきた。LGBの視座にたつ研究は、「同性愛者は異性愛規範に基づく家族から疎外されている」（風間 2003、p. 34）とし、定位家族を時に抑圧的に記述する。では、LGBを育てた母親は異性愛者であるがゆえに、LGBに対する「抑圧者」だといえるのか。結論づける前に立ち止まって考えたいのは、母親をとりまく社会、すなわち「女性」が置かれる性差別的構造の存在である。

本稿は、社会学の観点から家族集団のジェンダー規範を問い直す研究と、家族研究の分野で自明とされてきた異性愛規範を問い直す「正しいセクシュアリティ」論（竹村 2002）を整理し、後者の枠組みからカムアウトされた母親が抱く苦悩の分析を試みるものである。

1 近代家族論とフェミニズムからの家族の問い直し

家族研究の分野では、近代家族論やフェミニズムの論者が家族という集団の女性への抑圧性に焦点を合わせていた。

日本で高度経済成長期に定着したとされる（上野 1990、pp. 195-196、山田 1994、p. 112）近代家族は、落合恵美子によれば「(1) 家内領域と公共領域の分離、(2) 家族成員相互の強い情緒的關係、(3) 子ども中心主義 (4) 男は公共領域・女は家内領域という性別分業、(5) 家族の集団性の強化、(6) 社交の衰退、(7) 非親族の排除、(8) 核家族」により特徴づけられる（落合 1989、p. 18）。マルクス主義フェミニズムは、労働者（夫）を休ませ、次世代の労働力（子ども）を育てる女性の家事労働が、労働力を必要とする市場にとって必須であるにもかかわらず、それを「愛」の名のもとに無報酬で行われる「不払い労働 unpaid labor」（上野 1990、pp. 7-39）とされることに警笛を鳴らした。今日、核家族世帯は減少し続け、共働き世帯が増加するなかで、実体としての近代家族は多数派とはいえない。それにもかかわらず、「婚外子」に対する忌避感、性別役割分業を前提とした働き方が残る日本社会において、近代家族は家族らしい家族として理想化される「イデオロギーとしての家族」（島 2012）として生き続けている。

以上の研究は、近代家族が所与とするジェンダー規範を明らかにしている。しかしながら、それが異性愛規範に基づく家族制度であることには切りこんでいない。風間孝は、同性婚が反対されるのは、同性カップルが子どもだけでなく、「父」「母」に伴う「適切」な性別役割分業を再生産できないからだとして述べる。つまり近代家族は、「ジェンダー役割および規範的異性愛を組み込んできた」（風間 2003、

p. 41)。異性愛規範の考慮なしには、LGBが家族をめぐって経験する葛藤や苦悩は分析できないといえよう。

2 「正しいセクシュアリティ」からの近代家族論の問い直し

風間（2003）は、近代家族の異性愛規範から疎外されるLGBの立場を描くことに成功している。しかし、異性愛規範を前提とする家族内で、我が子からカムアウトされる母親の立場は触れられていない。彼女たちが組込まれる母親というジェンダー規範、再生産を女性に課す異性愛規範の双方を捉えるために、竹村和子の「正しいセクシュアリティ」（竹村 2002）を取り上げたい。

竹村は、「同性愛をそれ〔引用者注：異性愛〕と対立させることは、同性愛に対する抑圧構造をかえって見えなくさせる」（竹村 2002、p. 37）という問題意識から出発する。彼女のいう「抑圧構造」とは、「男女の性差別（セクシズム）」が、分ちがたく結びついた「〔ヘテロ〕セクシズム」であり、これが『正しいセクシュアリティ』の規範（ibid. p. 37）を生み出すと述べる。「正しいセクシュアリティ」とは、男女の「終身的な単婚を前提として、社会でヘゲモニーを得ている階級を再生産する家庭内のセクシュアリティ」（ibid. pp. 37-38）を指す。つまり、「正しいセクシュアリティ」を軸にセクシュアリティが序列化、階層化される構造が社会の問題であると論じている。

ここで注目すべきは、男女で異なる性の二重基準、すなわち、男性は家庭外において生殖から解放された性行為から快楽をえることが可能である一方、女性は「性器＝生殖中心のセクシュアリティの拘束」（ibid. p. 38）から家庭の内外で自由になれないと看破するジェンダーの視点である。セクシュアリティは「普遍的な分類法のなかで、セックスやジェンダーと並列的にならぶ独立した一項目ではなく、片方に生殖＝次世代再生産という目標をもち、もう片方に家庭を基盤とする男女の非対称性を戴く相互連関的なカテゴリー」（ibid. p.41）なのである。「正しいセクシュアリティ」の規範は、「合法的な異性愛を特権化し、婚外子の査閲や、離婚・再婚の制限」（ibid. p. 39）をもたらし、異性愛の中にヒエラルキーを作り出す。換言すれば、竹村は男女の異性愛ではなく、男女が婚姻を通して生涯結びつき、婚姻内の自然生殖で子どもが再生産されるべきであるとする、性差別的な「正しいセクシュアリティ」こそを問題視しているのである。

3 「正しいセクシュアリティ」論から検討する異性愛者の母親の経験

性差別的な基盤の上に成り立つ、近代のセクシュアリティ規範を問題化する竹村の視座を引き継ぎ、LGBの子がいる母親へのインタビューデータ（調査期間2007年3月～2009年8月）からいくつかの事例を分析したい。この調査は、日本国内で筆者が実施したもので、子どもからカムアウトされた親を支援する目的で作られたセルフヘルプグループ（SHG）と、そこには参加していない親から協力を得ている。SHGに参加している親は大文字、していない親は小文字、インタビュアーは「*」表記とした。分析の軸とするのは、1）男女で異なる性の基準、2）「正しいセクシュアリティ」が生み出すヒエラルキーである。具体的にはまず、ジェンダーの面からカミングアウトされた母親と父親の語りや、同性愛の「原因」を軸に対比的に示す。次に、カミングアウトされる以前の立ち位置の違いが、母親たちの語りに影響を及ぼすことを明らかにする。

(1) 同性愛の「原因」とされる母親——父親との比較

父親と母親で大きく異なるのは、自らを子どもの同性愛の「原因」として帰属させるかどうかであった。妊娠中、遺伝子等の「生得説」、成育環境や養育方法などの「環境説」が語られていたが、双方ともに原因とみなされているのは母親である。

A：やっぱりしばらくは、もう寝ても覚めても「何が悪かったん？私の妊娠中のなんか、悪いことがあったのかな」「何かが起こったから、こういうことになったのかな」っていうの、ものすごいね、生理的な面でも考えましたねーうん。〔息子がゲイ、母親70代〕

父親が原因説に言及する際も、やはり原因としてほのめかされるのは母親である。

b：〔胎児のときに浴びるホルモン〕シャワーが狂っちゃうと体と心が食い違ってくるっていうね、それは要するにホルモンのシャワーの影響だみたいな説があって、それを読んで「なるほど」と思ったことがあるんですけど、「ああ、なるほど微妙なもんなんだな」って。だけど、そういうものとはうちの娘は違うんだらうと。〔娘がバイセクシュアル、父親60代〕

母親に原因を追及する言説を背景に、家庭で子どもの養育責任を課される母親が、カムアウトされた際に父親よりも自責の念に悩まされやすいことがうかがえる。

(2) 「主婦」か「シングルマザー」か——「正しいセクシュアリティ」からの距離

さらに、母親内の語りの違いに着目したい。研究に協力した母親たちを、子育てのために一度は仕事を辞めて家庭に入っていた「主婦タイプ」と、夫はおらず仕事をしながら子どもを育てたり、自分の定住家族がシングルマザー世帯だった「シングルマザータイプ」とにわけてみる³。主婦タイプは自らを「原因」として責め、子どもが異性愛ではないことを受け入れがたく悩んだと振り返るが、シングルマザータイプはそうではない⁴。具体的にみていこう。

後にカムアウトする息子と、第二子を妊娠した際に数日間離れたことが、息子が同性愛になった原因だと「確信した」という主婦タイプのCさんはこう述べている。

C：そしたら、「私になんかすれば取り返せるかもしれない」って思ったのね。で、あたしの気持ちを〇〇〔息子の名前〕が、「ママ」って言ってね、〔寄って〕来ても、きっと自分でも、〇〇自身も、もうわかってないその、もう〔心の〕奥の奥の部分に、そういう私に対する思いがあって、そこがいけないんだらうと思ったわけ。だから、自分でもね、「ママ好きだよ」って、「ほんと好きだ」と思ってるんだけど、ほんとに憎しみがほんとにあるんじゃないとかね。(中略) 知らないところで、ね、それがあって、それが〇〇にもわかんないうちに、それ出てきて、そのために女性が嫌いになったんだって、それが一番確信できちゃったの、自分ではね。で、それから、すごいそれで悩んじゃった。それで「なんとかできないか、なんとかできないか」とかね、思ったんだけど、なんとかできなかった〔笑〕。

*：〔笑〕最初はじゃその、同性愛っていわれたときとか、そういうイメージは、その、男の人、女

の人が嫌いでも男の人を好きになるんだってというような感じの理解で理解してたってこと？

C：そそ、そういう感じ、そう理解してた。そう、自分の、それが一番のね、最終的な理解だったのね。だから〔息子が〕私を好きになれば、女の人を好きになるんじゃないかって。って思ったから、そう。〔息子がゲイ、母親50代〕

原因を特定したと実感した母親を待ち構えるのは、母親失格の烙印であった。「タイムマシーンがあったら、そこに戻りたいと思って、どうしても〔息子を〕抱きしめたかった」と、Cさんは強い自責の念に苦しんだ。母親原因説を引き受ける母親は、こうして一人で悩みを深めることになってしまう。

異性愛が「普通」だと考えていた主婦タイプのDさん〔娘がレズビアン、母親60代〕は、『『ともかくこれは人には言ってはいけない』』と。だから『家族にも言えない』』と、カミングアウトされたことさえ数年間口に出さずに過ごしていたと言う。一方、シングルマザーとして息子を育てたEさんは、自分が離婚していたからこそカミングアウト後、楽だったと語っている。

E：家族の形態自体が、もう、イレギュラーよね、普通じゃないよね。〔元夫ではない男性の〕パートナーの人と〔事実婚〕、ねえ？一緒のところでいるんだから、ほんまに〔笑〕今のフランスの女の人みたいに、一回離婚して、次のパートナーと一緒にやってるみたいなね、そういう感じ、もう、うん。だから逆にそれは楽やった。家っていう、しづらみがなかったからね。〔息子がゲイ、母親50代〕

家庭内暴力をふるう父親がいたfさんは〔娘がバイセクシュアル、母親40代〕、「自分の生い立ちがそんな、世間体を気にしてたら大変なことになるような部分があったんで、世間体はほとんど気にせず」、娘がバイセクシュアルであることには悩まなかったと話している。

カミングアウトされた時、「子どもの方が、心配して、私は別に」と感じたgさんは、ショックを受けない理由に、離婚後の忙しさとそれ故の子どもとの距離を挙げた。

g：多分、普通の知った親とは私は多分感覚が違う。あの子〔レズビアンの娘〕にも言ってあるけど。普通の親は多分、とんでもないショックを受けると思う。でも私はね、あの子が三つのときに離婚しちゃったから、そのまんま、ずっと忙しく育って行って、全然〔子どもを〕見てないから、躰もろくにしていな、あの子は休みになったら○●〔gさんの故郷〕行っちゃったりして、だから、うーん、普通の親よりは離れて暮らしてるから、あまりその、子どもってばかり集中していないから、そんなにねショックとかもないし、「まあそんなもんなんだな」とかね。〔娘がレズビアン、母親50代〕

これらの結果を、「正しいセクシュアリティ」に当てはめて考えてみよう。子育ての担い手として期待される母親が、異性愛の子を再生産できなかつたため、自責の念に悩まされると捉えることができる。加えて、主婦タイプの方が子どもの非異性愛の受け入れがたさを語るのは、当初は「正しいセクシュアリティ」のヒエラルキーでは上位——性別役割分業に基づき、婚姻内で次世代再生産に専念している場所——にいた彼女たちが、子どものカミングアウトを契機に、遠く離れた場へと位置づけられた

ことを意識したからではないだろうか。夫がいない、離婚した家庭で育ったシングルマザータイプの女性たちは、元々、「正しいセクシュアリティ」の下位に位置していたため、子どもが非異性愛であることに、それほど抵抗感を示さなかったと考えられる。

おわりに

男女で異なる性規範によって、母親が子を異性愛者に育て上げられなかった自己を責め、同時に「正しいセクシュアリティ」からの距離の違いが、母親がカミングアウトの受け止め方に差を生じさせていた。性別役割分業に親和的な家庭生活を送ってきた主婦タイプのほうが、同性愛嫌悪をより強く内面化していたように、「正しいセクシュアリティ」と同性愛嫌悪は不可分である。

本稿を通して、「異性愛ではない子」を、妊娠し、出産し、育ててしまったという、母親の強い責任意識を析出した。彼女たちが背負う苦悩は、近代家族の基盤である異性愛規範に抵触した際の社会からのサンクションでもある。しかし、近代家族の規範を相対化できるようになった親たちは、それから離れた思考方法を身につけるようになる。彼女たちのその後の実践については、別の機会に論じたい⁵。

(さんべ・みちこ／お茶の水女子大学大学院リサーチフェロー)

注

- 1 本研究の一部は文部科学省研究費（日本学術振興会特別研究員）、お茶の水女子大学GCOE「格差センシティブな人間発達科学の創成」公募研究・協働研究によるものを含む。
- 2 ヘテロノーマティヴィティとは、「性愛／異性愛の二元論によって異性愛から同性愛が分離され、互いに対立的な位置に配置されているが、それは両者が対等な関係に置かれるのではなく、むしろ異性愛という規範を生成するために同性愛を構成的外部として位置づける」ことに注目した概念である（河口 2003、p. 53）。
- 3 ちなみに父親の協力者は、全て妻のいる異性愛男性である。
- 4 シングルマザーでも、「原因」として自己を責めたり、主婦タイプとそれほど変わらない葛藤を抱えたりするケースも考えられる。本稿は、ショックをうけなかった理由、カミングアウトを乗り越えた理由の正当化言説として、シングルマザーの語りに注目している。
- 5 社会学の学的課題として、カムアウトされた母親が他者との関係のなかでどのように変化したのかも問わねばならない。本稿は、カムアウトされた当初の反応を振り返る語りのみを分析した。彼女たちのその後の対処戦略については、三部（2012、2014近刊）を参照されたい。

文献

- 河口和也『クィア・スタディーズ』岩波書店、2003年。
- 風間孝「同性婚のポリティクス」『家族社会学研究』第14巻第2号（2003）：pp. 32-42。
- 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年。
- 三部倫子『レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル「家族」の質的研究——可視性をめぐるジレンマと親子の相互行為』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科発達社会科学専攻平成23年度博士学位論文、2012年。
- .『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』（仮）、2014年（予定）。
- 島直子「家族規範と結婚の変容」松信ひろみ編著『近代家族のゆらぎと新しい家族のかたち』八千代出版、2012年。
- 竹村和子『愛について』岩波書店、2002年。

三部倫子 「正しいセクシュアリティ」論からみるカムアウトされた母親の経験

上野千鶴子『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、1990年。

山田昌弘『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』新曜社、1994年。

Weston, Kath. *Families We Choose: Lesbians, Gays, Kinship [Revised Edition]*. New York: Columbia University Press, 1997
[1991].